

守っていききたい日本の文化「旅館（R y o k a n）」

大阪府・天見温泉『南天苑』

【記事投稿者：店主 山崎 一弘】



■旧高野街道

旧高野街道（きゅうこうやかいどう）は、京都に発し、大阪・堺を経て、弘法大師空海が開いた真言密教の聖地、高野山に至る関西圏屈指の信仰の道です。この街道は、大きく分けて、京都を起点とする東高野街道と、大阪高麗橋から堺を経て南下する西高野街道があり、これら二つの街道は、河内長野で合流し、三日市宿を経て、大阪府の最南の郷、天見を通り、紀見峠を越えて紀州路へ入ります。

当館は、この高野街道筋で、古来より温泉の湧く天見に位置し、現在の大阪府と和歌山県との県境に建つ一軒宿の温泉旅館です。

天見温泉の歴史は南北朝時代にはじまったと伝えられ、河内長野市内では最古の温泉として知られています。高野街道の沿道という歴史的、地理的なこともあり。【極楽湯室の由来】として、『延元の昔、流谷八幡宮(マ)の社僧・法印賢覚、世の病弱に泣く不幸な人々を救わん為温泉を建設して広く接待せん事を 発願し流谷八幡宮の境内の地に萱葺きの浴室を建築して付近より湧出するラジュウム鉱泉を汲み、或いは薬草を混合して之を 沸し病弱に苦しむ老若男女をして入浴せしめられた。俗に之を極楽風呂と称し天見村における温泉の創めにして即ち極楽温泉の起源なり(略)』という古文書が、地元の民家に伝わっています。



■昭和30年当時の南天苑

昭和10年。東京駅や日本銀行本店などを設計した明治・大正時代を代表する建築家・辰野金吾氏の手がけた、希少な和風建築のひとつである堺大浜『潮湯別館・家族湯』の建物を、この天見の地に移築、これが、当館の前身となります。その後、戦時中に閉鎖休館していた当館を、南紀白浜の旅館で育った先代が、縁があって譲り受けたのは昭和24年。そして『天見温泉・南天苑（あまみおんせん・なんてんえん）』として開業し現在に至っています。大正・昭和初期の建築様式を偲ばせる貴重な建物であるとして、平成15年（2003年）3月20日国の有形登録文化財に登録されました。

屋号の「南天苑」とは、ここ天見の里の気候、環境が、低木の南天の生育によく適していて、全国でも有数の南天の産地であるということから名づけられました。南天は「難（なん）を転（てん）ずる」という縁起に添うようにという、願いがこめられています。

四方を金剛・葛城国定公園の自然豊かな山々を借景にした三千坪日本庭園には、野鳥たちが実を運び、地生えの南天が、そこかしこに自然に育ち。赤い実が冬場の寂しい庭を彩る風物となっています。



■南天は「難を転ずる」縁起物



■日本庭園300坪に咲き誇る桜

春ともなれば、山桜、ソメイヨシノ、八重桜など、100本近く植えられた桜が、時を移して、次々と満開を向かえ、桜のあとには、さつき、つつじ、花菖蒲、紫陽花へと、花の季節をお部屋から、居ながらにして満喫できます。

6月、天見川の溪流に蛍を追い。夏には25m屋外プールを備え、山々が色づく紅葉の競演は11月半ばから。赤や黄色に彩られた風景はさながら錦の模様。四季を通じて楽しめます。



■会席料理・前菜と椀物など一例



日本料理の楽しみは、四季折々の選りすぐった材料の持ち味を生かすことが信条。南天苑料理人は、月ごとにあれこれと智恵を出し、日々技術の研鑽と精進に励んでおります。春のたけのこ、夏の鮎や鰻、秋の松茸、冬の鍋、鍋物は山海の材料と和洋の菜を牛乳で炊く名物金剛鍋。創業以来、好評いただいております。また、牡丹鍋、郷土伝来の栢（かや）味噌を使った招福鍋など、お料理も季節ごとに彩りを変え、材料を吟味し、香りよく、器を選び、形式張らず、美味しい酒と一緒に一献、また一献と、お箸がすすみます。



■天見温泉

天見温泉は天然ラドンを豊富に含み、入浴することで強い発汗作用と新陳代謝をたかめるため、健康と美容にとっても効果があります。3000坪の庭園を囲む、緑豊かな山々と、浴衣姿に柔らかい自然の風、月毎に献立を変えて味わう日本の伝統料理。

大阪・難波から南海高野線で40分。野鳥たちの声が木霊す天見の里は、きっと心と体を癒し、リフレッシュしてくれます。天見温泉・南天苑は、今も昔もかわらぬ風情、ご来店をお待ちしています。



大阪府 天見温泉

南天苑

〒586-0062

大阪府河内長野市天見 158

Tel : 0721-68-8081